「心踊る」

伊藤貴晴　作

【１】

 踊りながら話す。

少女 あ、め、つ、ち、ほ、し、そ、ら、や、ま、、か、は、み、ね、た、に、く、も、き、り、む、ろ、こ、け、ひ、と、い、ぬ、う、へ、す、ゑ〔※１〕

少女 あめ、つち、ほし、そら、やま、、かは、みね、たに、くも、きり、むろ、こけ、ひと、いぬ、うへ、すゑ

少女 空から言葉が降ってきて、私の心は踊りだす。心が躍ると身体も踊る。私の身体は踊りだす。古代日本には言霊っていう概念があって、言葉には魂が宿るんだって。実はキリスト教でも似たような考え方があって、旧約聖書にはこうやって書いてある。「神は『光あれ』と言われた。すると光があった。〔※２〕」つまり神様があれと言ったものが生まれるってこと。言葉が先で、物が後。言葉があるから物が生まれる。物はうたかた、この世はかりそめ、憂き世になにか久しかるべき〔※３〕。言葉に魂が宿って、みんなの願いが込められて、そんなたくさんの願いを、神様は残らず聞いてくれるんだろうか。ひょっとしたら聞き漏らしたり、聞こえなかったりするのかもしれない。だったらちゃんと聞こえるように、私の声が届くように、大きな声で願わなくちゃ。どうか、どうか私の願いが叶いますように

少女 あめ、つち、ほし、そら、やま、、かは、みね、たに、くも、きり、むろ、こけ、ひと、いぬ、うへ、すゑ

少女 光の速さで一年かかる距離が一光年だから、一光年離れた星の光は一年前の光で、その星の姿は一年前の姿で、私は十七歳で、十七光年離れた星から私を観測すると私は生まれたばかりの赤ん坊に見えるっていう衝撃の事実。二十億光年の孤独にくしゃみが出そう〔※４〕。宇宙との境目は地上から百キロくらいのところで、月までの距離は三十八万キロで、月まで歩いて行ったら十年くらいかかるらしい。そんなこと言われたら「歩いて行くわけないやろ」って関西弁でつっこんじゃうけど、そもそも宇宙空間は歩けないでしょって標準語でつっこみ入れてしまったり。というわけで歩いてみる。大気圏から脱出する百キロを。月までの三十八万キロを。あるいは地球の直径一万二千七百キロを。でも実際地球一周してる間に迷子になりそう。エベレストの高さは八千メートル以上、マリアナ海溝の深さは一万メートル以上。エベレストに登った人はいるけど、マリアナ海溝に潜った人はいない。宇宙に行った人間は、まだ地球の一番深いところにたどり着いてない

少女 あめ、つち、ほし、そら、やま、かは、みね、たに、くも、きり、むろ、こけ、ひと、いぬ、うへ、すゑ

少女 声が響いて、世界が生まれる。言葉を紡いで、命が宿る。私は何にでもなれる。私はどこへでも行ける。私は遥かな旅人になって、世界の果てのその先を目指す。宇宙の膨張を追い越す。光の速さを追い越す。過去も未来も飛び越える。私のこの声と身体で、何でも生み出すことができる。星も、命も、宇宙も、光も、私の声で生み出せる。そして踊ろう。世界と踊ろう。私が作った世界と踊ろう。

少女 あんどろ、めだ、つき、ちきゅう、ほんとの、しあわせ、そうぞう、らんはんしゃ、やさしさ、まさつ、かせい、わすれる、みうしなう、ねがい、たいきけん、にゅーとん、くらやみ、もくせい、きまぐれ、りゅうせいぐん、むじんたんさ、ろけっと、こぺるにくす、けぷらー、ひびき、とまどい、いのち、ぬくもり、うん、へいき、すすもう、エンドレスの明日に

 終わり。

〔※１〕「あめつちの詞」

〔※２〕『旧約聖書』

〔※３〕『伊勢物語』

〔※４〕「二十億光年の孤独」谷川俊太郎